

A decorative dashed line graphic that starts from the left, curves upwards and to the right, then loops back down and to the left, ending near the center of the page.

はじめに

本書は、教育について、大学ではじめて学ぶ方向けに、教育社会学の基本的な考え方と知識が身につくように編まれた教科書である。また、教育学の学部学科や教職課程に所属し、教職を志望する学生だけでなく、広く教育社会学を学びたいという学生・教員・社会人の方にも開かれたテキストである。「学問を通して社会とつながる」という y-knot シリーズのコンセプトを踏まえ、自己紹介や誰しもが経験する学校の例をはじめとして、身近な事例から教育社会学の基礎を理解する説明を心がけた。

教育社会学のみならず、教育学を学んで最初に理解すべきことは、「あなたが受けてきた教育は唯一の教育ではない」とこと、「すべての教育は万能ではない」とことである。教育社会学は、この2つのことを理解するために、社会学という学問からさまざまな補助線を引いて、社会との関係のなかで、教育を理解しようとする。この説明を読んで、教育社会学っておもしろそうだなと思った人だけでなく、「何を意味するかよくわからないけどちょっと気になった」人もぜひ本書を手にとって先まで読んでほしい。

大学で学ぶ学問は、高校までで学ぶ科目の内容以上に、流動的に変化するし、必ずしもやさしいものから難しいものにきれいに配列されているわけではない。それは、大学で学ぶ学問が進行中の新しい知を生み出す研究活動によって常に書き換わりながら成り立って

いるからである。教育学や教育社会学も例外ではなく、本書の執筆者4名も大学で教育社会学について、研究と教育の両方を行っている。本書は、教育社会学の基本事項や古典的な事項を踏まえつつも、本書を生かして、教育や他分野で仕事に携わる際に、皆さんの未来にアイデアを提供できるトピックを意識して選んでいる。

教育社会学は、研究としては、エビデンスを示しながら議論することを重視している。現実世界からエビデンスを収集するために、多くの教育社会学の研究者は、社会調査を行う。社会調査の手法はさまざまにあるが、大別して、質問紙調査（アンケート調査）などを用いて数字となったデータを扱う量的調査（定量的調査）*と、インタビューやフィールドワークを用いた質的調査（定性的調査）*がある。本書の本文やコラムでは、このような社会調査の仕方の基礎的な話題にも触れている。本書を通じて、社会調査をして、アウトプットをすることに向けた基本事項についても学ぶことができる。

本書は、4人で執筆した4部構成となっている。第1章から順番に読むことを想定して編集しているが、関心のある部や章について先取りして読んでもらっても問題なく読めるだろう。

本書は、教職課程のカリキュラムの「教育の基礎的理解に関する科目」のうち、「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」を扱う科目として、また、社会科、公民科における「教科及び教科の指導法に関する科目」の社会学の一科目の教科書としても使えるように、内容を配慮している。

本書を「教育の基礎的理解に関する科目」で用いる場合には、教育に関する社会的事項、制度的事項、経営的事項について、主に第Ⅰ部と第Ⅲ部で基礎的知識に触れている。基本的な仕組みをこれらの部で理解しながら、家庭について第Ⅱ部で、地域をはじめとする

学校外の事柄を第Ⅳ部で扱っているため、現行の教職課程のカリキュラムが定める「学校と地域との連携」「学校安全への対応」に話題を展開することが可能である。

一方「教科及び教科の指導法に関する科目」の社会学の一科目として用いる場合は、第1章で、社会学の考え方について導入的な説明をしているので、そこをまず理解したうえで、関心のあるトピックを読んでいくとよいだろう。つづく章では、教育社会学の基本的な教科書をイメージしつつ、階層と不平等の社会学、家族社会学、ジェンダーの社会学、福祉社会学、子ども社会学、社会問題の社会学、メディア社会学などにも展開できる基本的なトピックについて触れている。このように本書は、教育社会学の教科書としてだけでなく、周囲の身近な例を用いた社会学の教科書・副読本としても活用可能である。

本書を通じて、教育社会学のアウトプットに寄与できる工夫をいくつか行っている。各章冒頭のクイズに加えて、出版社を通じて提供されるウェブサポートには各章の事前課題なども収録したので、ぜひ学修を進めるうえでの参考にしてほしい。また、各章には、演習問題と読書案内をつけておいた。演習問題は、各章の内容を踏まえて、小レポートの課題となるようなものを入れてある。読書案内は、教育社会学や関連分野の書籍について入門書だけでなく、専門的に学ぶのに入口となるような文献も入れている。本文の引用文献と合わせて、興味のあるものは積極的に参考にしてほしい。書籍末尾のキーワード解説は、教育社会学の基本概念として重要と考えられるものの、本文では言及しきれなかった用語を中心に収録した。索引と合わせて基本概念の確認に活用してほしい。

本書執筆にあたっては、有斐閣編集部の松井智恵子氏、堀奈美子氏に大変お世話になった。2021年に企画を開始した折から、磯尾奈加子氏（慶應義塾大学大学院）に草稿の検討会の書記と作業のとりまとめについて、大変なご助力を賜った。記して感謝申し上げる。

2022年10月

執筆者を代表して 相澤 真一

/// ウェブサポートページ ///

学習をサポートする資料を提供しています。下記のQRコードからご参照ください。

https://www.yuhikaku.co.jp/yuhikaku_pr/y-knot/list/20003p/



/// キーワード解説 ///

本文中の★印のついた用語は巻末に解説を掲載しています。

目 次

はじめに	i
------------	---

第 I 部 あなたと社会の関係から考える教育

第 1 章 あなたは誰?	5
教育社会学の考え方入門	

1 教育社会学ってなんだろう?	7
-----------------------	---

あなたと社会のつながりを考えてみよう (7) 社会学的想像力をもって教育を理解しよう (8) 教育を善悪から決めつけて判断しない (10)

2 教育社会学から見て、教育にはどのような役割があるのだろうか	13
---------------------------------------	----

社会に合わせながら生きていく (13) まわりに合わせることの意味 (14) 私たちは創られた伝統としてのルールに合わせて生きている (17)

3 教育社会学から見る日本の学校	18
------------------------	----

第 2 章 試験と学歴から考える教育	23
--------------------------	----

1 試験と学歴は教育と社会の重要な交差点	25
----------------------------	----

学歴の価値は時代や世代によって異なる (25) ユニバーサル・アクセス時代の大学 (29)

2	職業世界への入口としての学校から仕事への移行	30
	「社会人」ってなんだろう (30) 1990 年代後半から 2000 年代前半 の就職氷河期とリーマンショック (31) 入学試験と就職試験の違い (32) 正社員と他の社員を区別する日本社会 (32)	
3	職業としての学校教員から見る教育と社会	34
	資格としての教員免許・職業としての教員 (34) 教員になりやすい 時代・なりにくい時代 (37)	
第 3	章 格差と不平等から考える教育	41
1	日本の教育の格差と不平等	43
	格差ではなく不平等という言葉で考える (43) 格差・不平等を生み 出すものは何か (44) 教育機会の平等を実現するためにどのような 対策があるのか (45)	
2	お金だけでは測れない不平等と蓄積する不平等	46
	文化資本と社会関係資本 (46) 不平等の世代間継承と教育の役割 (47) 世界で蓄積する不平等と教育の役割 (48)	
3	先進国の不平等と途上国の不平等	52
	国と国との間の不平等は広がっているか? (52) 絶対的貧困と相対 的貧困 (53)	

第 II 部 家族から見た教育

第 4	章 教育の場としての家庭	63
1	強調される家庭教育	65
	しつけは衰退しているか (65) 「新しい能力」の誕生? (67) 能力不 安社会のなかの家庭教育 (68)	

2	社会階層と子育てスタイル	70
	子育ての階層間格差 (70) 自然な成長と計画的育成 (72) 優れた子育てはあるのか (73)	
3	子育てにおける子ども	75
	子ども期の誕生 (75) 子育ての社会化 (76) 人生の主体としての子ども (77)	
第 5	章 ジェンダーと子育て	83
1	男女の「らしさ」を身につける	85
	認知発達の影響 (85) 環境を通して学習する (86) 性役割の社会化 (88) ジェンダーは構築される (89)	
2	教育を受けることのジェンダーギャップ	90
	男女の教育格差が大きい日本 (90) 家族の教育期待 (92) 維持されるジェンダートラック (92)	
3	女性にとっての家庭・労働	94
	男性は仕事, 女性は家事育児? (94) 男女間賃金格差 (96) 女性管理職の少なさ (99)	
第 6	章 学校のなかの家族	103
1	家族のいま	105
	近代家族とは (105) 家族の個人化 (106) 家族のリスク (108)	
2	学校が期待する家族像	109
	道徳教科書のなかの家族 (109) マイノリティへの教師のまなざし (111) 保護者の学校参加 (112)	
3	家族主義を超える	114
	家族に代わるもの? (114) 教育と福祉の家族主義 (116) 家族と学校のこれから (117)	

第Ⅲ部 学校を生き抜く

第7章 見えない教育問題 127

1 「エビデンス」という毒薬 129

過去最多は過去最悪か？(129) いじめの実態は把握できるのか
(130) 「教育の科学」からのアプローチ(134)

2 教育問題の実像と虚像 135

不登校の実態は把握できるのか(135) 心理主義化と厳罰化(137)
統計資料からの反論(139)

3 科学の限界 141

質的に迫る(141) 質的研究の方法(143) 虚像を信じる？(144)

第8章 善と悪の間から 149

1 受験勉強の功罪 151

無理やり勉強させられる(151) 性善説と性悪説(152) 営みの「意
図せざる結果」(153)

2 「問題」はつくられる 155

善と悪の境界(155) ラベルを貼る人(157) 社会問題の構築(159)

3 権力者は誰か 161

文字がなかった時代(161) 知識の所有者(163) インターネットが
教師－子ども関係を揺るがす(164)

第9章 「子どものため」の陥穽 169

1 教師の長時間労働 171

聖性が付与された活動(171) 何でも屋による感情労働(174) 聖職

者としての教師像 (176)

2 「自主的な活動」の魅力と魔力 179

部活動の過熱 (179) Twitter における部活動改革の声 (180)

3 学校化社会 182

規律訓練型の行動様式 (182) 学校的価値の浸透 (183)

第 IV 部 マイノリティから問う教育と社会

第 10 章 マイノリティの子どもの排除と包摂 193

1 学校の中の多様性・公正・包摂性 196

子どもの違いはどう扱われるか (196) 多様性・社会的公正の教育 (199)

2 マイノリティの子どもの排除されてきたか 201

マイノリティの排除と包摂 (201) 社会的カテゴリーと多様な抑圧 (203) 不可視化される困難性——交差性 (204)

3 マジョリティの特権 206

「普通」を相対化する

第 11 章 移民の子どもの多様な学びの場 211

1 子ども・若者が生きる世界 214

多文化化する日本と移民の子ども (214) 子どもの視点と生活世界 (215)

2 子ども・若者の居場所 218

マイノリティと居場所 (218) 移民の子どものフォーマルな学びの場 (220) 移民の子どものインフォーマルな学びの場 (222)

3 若者とメディア・ポピュラーカルチャー 223

若者とソーシャルメディア (223) 移民の若者とメディア・ポピュラーカルチャー (224)

第 12 章 ともにつくる教育と社会へ 229

1 マイノリティの教育研究と政策の動き 232

マイノリティの教育研究 (232) マイノリティの子どもをめぐる法制度の動き (233)

2 マイノリティへのまなざしを問う 235

マイノリティの支援とは (235) 欠如の視点からストレングスアプローチへ (237)

3 教育現場にどう貢献するか 240

現場に根差す研究——教育臨床社会学 (240) 当事者とともに行う研究——参加型アクションリサーチ (241)

キーワード解説 247

索引 256

事項索引 (256) 人名索引 (262)

Column 一覧

- 1 社会は存在する? —— 教育社会学と認識論 (12)
- 2 あなたは友情派? 対立派? —— 教育社会学における機能主義と葛藤主義 (16)
- 3 日本発の学歴社会論とそのゆくえ (28)
- 4 なぜ大学に通うことは得になるのだろうか (33)
- 5 公式統計と教育社会学 (36)
- 6 教育社会学と計量分析 (49)
- 7 進学の不平等を階層研究からどう説明するか (50)

- 8 SDGs と不平等と教育社会学 (54)
- 9 家庭教育について知るための調査方法 (69)
- 10 研究倫理 (78)
- 11 母子世帯と貧困 (98)
- 12 「おなかが痛くて…」は不登校? (136)
- 13 ウェブ調査は信用できない? (142)
- 14 誰の目線なのか!? (158)
- 15 社会学者はすべてを知っている!? (160)
- 16 時間管理なき長時間労働 (177)
- 17 校則と地域社会 (185)
- 18 わたしの特権について考える (207)
- 19 アメリカで移民の高校生のフィールドワークをする (217)

第 10 章イラスト：こびよ

著者紹介

相澤 真一（あいざわ しんいち）

担当 第Ⅰ部

上智大学総合人間科学部教育学科准教授

主 著

『〈高卒当然社会〉の戦後史』新曜社，2014年（共著）。『子どもと貧困の戦後史』青弓社，2016年（共著）。『音楽で生きる方法』青弓社，2020年（共著）。

/// 読者へのメッセージ ///

教育社会学は、人が社会で生きるうえで、今まで気づけなかった生きづらさに気づくかもしれないけれども最後に希望が残るパンドラの箱のような学問だと思います。この本を通じて、一緒にパンドラの箱を開けてみませんか？

伊佐 夏実（いさ なつみ）

担当 第Ⅱ部

宝塚大学看護学部准教授

主 著

『学力を支える家族と教育戦略』明石書店，2019年（編著）。『子育て家庭を内側からみる』『社会と調査』28：35-43頁，2022年（共著）。『難関大に進学する女子はなぜ少ないのか』『教育社会学研究』109：5-27頁，2022年。

/// 読者へのメッセージ ///

これまでの自分の教育経験について、何かややもやとした違和感や疑問を感じたことのある人のほうが、もしかするとこのテキストの内容に共感するかもしれません。教育社会学の対象は非常に幅広いので、その魅力に気づいた人はぜひ、関連する文献をたくさん読んでください。

内田 良（うちだ りょう）

担当 第Ⅲ部

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

主 著

『教育という病』 光文社，2015 年。『ブラック部活動』 東洋館出版社，2017 年。『部活動の社会学』 岩波書店，2021 年（編著）。

/// 読者へのメッセージ ///

自身の価値観を所与とせず，世の中の当たり前を前提とせず，心は熱く，分析は冷静に。私が「教育社会学」にはじめて出会ったときのあの興奮を，時空間を超えて皆さんとシェアできれば幸いです。

徳永 智子（とくなが ともこ）

担当 第Ⅳ部

筑波大学人間系准教授

主 著

「国境を越える想像上の『ホーム』」『異文化間教育』40：70-84，2014 年。
Learning to Belong in the World, Springer, 2018. *Japanese Education in a Global Age*, Springer, 2018（共編）。

/// 読者へのメッセージ ///

本書で学んだ視点を使って，皆さんのこれまでの経験や今の生活をふりかえってみましょう。きっと異なる世界が見えてくるはずです。それらを仲間と共有し，ともに新しい教育社会学をつくっていきましょう。

あなたと社会の関係から 考える教育

Chapter

- 1 あなたは誰？ 教育社会学の考え方入門
- 2 試験と学歴から考える教育
- 3 格差と不平等から考える教育

Introduction

第Ⅰ部では、教育社会学で考える「社会」について、この本を読んでいるあなたとの関係から、あなたが生きている社会がどのようにできているか、について考える。

これから教育社会学で考える社会は、中学・高校時代に学ぶ社会科と少し異なっていると感じるかもしれない。皆さんは中学・高校時代に社会科は好きだっただろうか。社会科が好きか嫌いかは、社会科の「暗記」が得意か苦手かによるのではなかろうか。現在の中学の社会科および高校の地歴・公民科は、この世界がどのようにできているかを覚えながら理解することに重点が置かれているからである。

大学で学ぶ社会学における「社会」とは、もっと「生^{なま}」の生きたものを対象としている。社会学における社会と最も近いイメージの社会は小学校の3、4年生の社会科である。NHKでこの学年向けに放映されている「コノマチ☆リサーチ」や「たんけんぼくのまち」といった番組を見たことがあるだろうか。これらの番組では、主人公の住んでいるまちがどのようにできているかについて、産業、交通、政治や経済などいろいろな角度から注目し、調べて、考察する。

このように、あなたのまわりの社会がどのように出来上がっているかについて、教育を1つの手がかりにしながら考えるのが教育社会学である。第Ⅰ部のそれぞれの章では、あなたのまわりの世界を理解するために、社会学の考え方の補助線を引いてみる。

第1章の補助線はあなたの自己紹介である。この本を手にと

た人の多くは学生であろうか。学生であること自体が社会とのあるつながりを示している。ここから、あなたと身のまわりの社会とのつながりを考えてみよう。

第2章の補助線は、試験と学歴である。あなたが経験した試験だけでなく、あなたとは異なる世代の人がどのような試験を経て、どのような学歴を得たのかを補助線にする。

第3章の補助線は、あなたがこれまでに教育を受けるのにかかったお金である。2017年の国際比較統計によると、OECD加盟国平均で1人が学校に通うのにかかる費用は年間約130万円で、日本もほぼ同程度である。このうち、日本では公財政支出が95万円ほどで、残りは私費である（『図表で見る教育 OECD インディケーター』より）。学校に通うことは国としても家計としてもお金がかかる。第3章では、教育を受けるのにかかるお金を手がかりにして、社会や教育にどのような格差や不平等が存在するかに注目する。

教育社会学の研究は、教育と社会の現実を把握するために行われている。よりよい教育と社会のあり方を構想するために、まずは、現実はどういうにできているのかに注目する。そのために、いったん、善悪を離れて教育と社会を見つめなおす必要がある。このことを第1章から考えながら実践してみよう。

あなたは誰？

教育社会学の考え方入門

第

1

Chapter
章

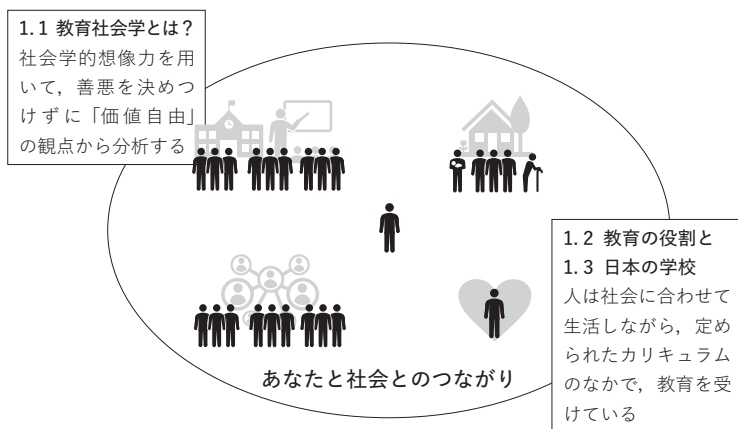
Quiz クイズ

- Q1.1 現在、日本の 18 歳のうち、およそ何%くらいの人が大学生であろうか。
a. 40% b. 60% c. 80% d. 100%
- Q1.2 先進諸国の大学入学平均年齢は何歳だろうか。
a. 16 歳 b. 18 歳 c. 20 歳 d. 22 歳
- Q1.3 日本の中学 1 年生の学習指導要領に定められた国語・社会・数学・理科・外国語の合計時限数は、中学 1 年生の授業全体の何%だろうか。
a. 50% b. 60% c. 70% d. 80%

Answer クイズの答え（解説は本文中）

Q1.1 b Q1.2 d Q1.3 b

Chapter structure 本章の構成



本章の概要

本章では、はじめて教育社会学を学ぶ人のために、教育社会学の考え方を紹介する。その導入として、あなたは何者かを考えてみる。

1

教育社会学ってなんだろう？



□ あなたと社会のつながりを考えてみよう

この本を手にとっている方は、大学に通っている人だろうか。あるいは、教育社会学という学問に関心をもった高校生や学校教員あるいは保護者の方かもしれない。誰もがはじめて学べる教育社会学をこの教科書は目指している。その入口として、誰かに自己紹介をするつもりで、「あなたはどんな人か」を考えてみてもらえないだろうか。

たぶん、多くの方は、「XX大学の教育学部の学生である」あるいは「学校の教員をしている」「高校生の子どもがいる」といった自己紹介になるかもしれない。出身地に特徴があったら「ある県の出身」で「一人暮らしをしていること」を話題に取り上げるかもしれないし、外国の出身であれば、どこかの国から来たことを話題に取り上げるだろう。また、学部のたくさんある大学ならば、所属している学部がどこか、あるいは、勉強したいことを自己紹介で取り上げるかもしれない。

皆さんが、こうやって自己紹介をしようとするとき、あなたは新しい社会と接点をもとうとしている。自己紹介をしようとするあなたが社会と接点をもって話そうとするのと同じように、教育社会学は、個人と教育と社会の関係を理解しようとする学問である。

教育社会学は、教育を社会学から考える学問である。「教育社会学」のように、4文字+学の学問の名詞には、「対象」+「方法論」の学問名と「対象」+「学」の学問名がある。教育社会学や教育心

理学，教育経済学は，「対象」＋「方法論」で構成されている。一方で，教育方法学，学校教育学，社会教育学などは，それぞれ教育方法，学校教育，社会教育を対象にした学問である。

逆にいえば，教育社会学は，家族社会学や都市社会学などと，社会学という方法論では，共通した考え方をもっている。本書もある部分では，教育を対象にした社会学の入門になっていることがある。教育社会学を学んでみると，他の教育学と違うと感じることや，逆に，他の社会学と似ていると感じることがある。それは，教育社会学に社会学の発想がしばしば埋め込まれていることに起因している。

□▷ 社会学的想像力をもって教育を理解しよう

教育社会学は，個人と教育と社会の関係を理解しようとする学問である，と述べた。個人と教育と社会の関係といっても，ぴんとこないかもしれない。これはわかりやすく言い換えるならば，「人の受けた教育にどういう意味があるかを考える学問である」といえる。

自己紹介を振り返ってみよう。「XX大学の教育学部の学生である」と話したら，おそらく皆さんも「XX大学」「教育学部」「学生」の3語のどこかに反応するのではないだろうか。XX大学は，自分と同じ大学かもしれないし，違う大学かもしれない，あるいは，自分の家の近くの大学かもしれないし，遠いところにあるかもしれない。とても入試の難しいことで知られている大学かもしれない。「教育学部」であると聞けば，学校の先生を目指して勉強している人なのかも，と思うかもしれないし，「学生」であると聞けば，自分と同じだと思うかもしれないし，何年生であるかに関心が湧くかもしれない。

私たちは，自己紹介をしたり，聞いたりしたときに，それぞれの

個人を、ある時代のある社会状況のなかに位置づけるために、たくさんの想像力を働かせることができる。この想像力のことを、アメリカの社会学者 C. W. ミルズは「社会学的想像力」と呼んだ。ミルズは、社会科学の最初のレッスンは、このような社会学的想像力を働かせ始めることだと主張する（ミルズ 2017）。

冒頭のクイズの **Q1.1** の答え合わせをしながら考えてみよう。現在、日本の 18 歳のうち、大学生の割合の正解は、**b** の 60% で、最新の数字では、58.9% である（2021 年「学校基本調査」）。これが正解だと気づいた人は、日本社会について、少し想像力が豊かかもしれない。

一方で、他の 3 つの選択肢を答えた人もそれなりに社会学的想像力をもって答えた結果だと理解できる。**a** の 40% と答えた人は、地方の人に多いかもしれない。47 都道府県のうち、2020 年時点で四年制大学の進学率が 40% を下回り、短大を含めても 45% を下回る県が 7 県ある。このような県に住んでいる方は、同級生のなかで大学に行く人は半分くらいだと思って **a** を選んだのではないかと考えられる。**c** の 80% と答えた人も、見方を変えれば理解できる回答である。なぜならば、専門学校生を含めた進学率は全国で 83.5% になるからである。また、最も大学進学率の高い東京都や京都府などでは 70% を超えている。このような都府の出身の方のなかには **c** と答えた人も少なくないのではないかと考えられる。また、皆さんのなかには、進学率 100% の「進学校」や「付属校」の出身の方もいるのではないだろうか。このような学校に小さいころから通っていれば、**d** と答えて、ほぼ 100% 大学に行くのが当たり前だと思ってきたかもしれない。このように、18 歳の人々のうち、大学生はどのくらいの割合でいるのかを考えてみるだけでも、

日本社会のいろいろなつながりが見えてくる。

□> 教育を善悪から決めつけて判断しない

このように、教育社会学の考え方の基本は、教育を社会学的想像力をもって観察してみることにある。それとともに、もう1つ大事な教育社会学の考え方の基本がある。それは、教育を善悪からいったん切り離して理解しようとすることにある。

たとえば、冒頭のクイズの Q1.2 の解説をしながら、このことを考えてみよう。先進諸国の大学入学平均年齢は何歳だろうか。日本では、浪人する人たちがいたとしても、2020 年代現在では、多くの人は高校卒業後、「現役」で、そのまま進学する。日本での答えは、b の 18 歳となる。なお、国際的に見て、大学進学年齢の平均は、日本と韓国の 18 歳が最も若い。それに対して、先進諸国全体での平均値はどの値になるだろうか。答えは d の 22 歳である。もちろん、これは入学年齢で、卒業年齢ではない。すなわち、多くの先進諸国では、日本の大学生が卒業する頃に、大学に入ることが平均なのである。また、先に取り上げた韓国は、男子に徴兵制があるため、卒業年齢は日本よりも遅くなる。すなわち、日本は、世界で最も若くして大学生になり、卒業する社会である (OECD 2022)。

この答えを知って、18 歳で大学に入り、22 歳で卒業することが世界の当たり前ではないことに気づくだろう。また、22 歳になれば、大学を卒業して就職することが当たり前でないことにも気づくかもしれない。このように、ある年齢に対して、どのような社会的な意味づけを行うかは、社会によって大きく異なっている (チュダコフ 2015)。

この点を踏まえて、皆が 18 歳から大学に通う日本のような社会

と、何年かを経て大学に通うことが広く認められた社会との間で、どちらの学校や社会が善いか、悪いかを即断しないことが教育社会学の考え方の重要な第一歩となる。むしろ、「なぜ日本では大学に18歳で通い、4年間で卒業することが当たり前なのか」「なぜ他の国は高校卒業後何年かしてから大学に行くことが多いのか」と考えてみると、それぞれの国の教育と社会の関係を理解する手がかりになる。

たとえば、「なぜ日本では大学に18歳で通い、4年間で卒業することが当たり前なのか」と考えてみたとき、「親に学費を払ってもらっているから」「親に現役で行けと言われたから」という人は多いのではないだろうか。このように、親に学費を払ってもらっている社会もあれば、税金が高い代わりに大学の学費が安く、その分、卒業が難しく、必要に応じて大学に通うことを許容する社会もある。これも一概にどちらが善い悪いと判断できないことがある。たとえば、日本で大学を卒業した直後に失業者になりづらいのは、日本が、一斉に入学し、一斉に卒業し、一斉に就職する社会であるからだ(矢野 2011)。

どちらの教育のあり方も、その社会のなかでは合理性をもって存在している。よって、ある教育を簡単に善い、悪いと判断することは難しいのである。この点を、ドイツの社会学者 M. ウェーバーは、対象に対して(善悪を決めつけずに)「価値自由」の観点から客観的に分析することの重要性を主張している(ヴェーバー 1998)。教育社会学は、他の社会学と同様に、この方法に則って、事象の善悪を簡単に決めつけようとしない。ある教育が善いか、悪いかをいったん切り離して考えられるようになることが教育社会学の考え方を身につける大事な一歩である。

コラム1 社会は存在する？——教育社会学と認識論 1980年

代にイギリスで首相を務めたマーガレット・サッチャーは1987年に「社会なんて存在しない」と述べて、福祉国家の改革を行った。その後、同じ保守党のジョンソン元首相は2020年に「社会というものはある」と述べた。

人と人が2人以上いる時に、ただそこに2人しかいないのか、それともそれ以上の何かが存在するのか、という認識の問題は、社会科学の根本にかかわる問題である。

教育社会学は、「個人と教育と社会の関係を理解しようとする学問である」と紹介した。つまり、社会は存在する、という立場が基本である。しかしながら、社会というものを認識しようとするときに、それを実在するものととらえるか、想像上のものととらえるか、いくつかの立場がある。ある社会科学の方法論の教科書に則ると、この認識論は、大きく分けて3つの立場に分かれる。実証主義、批判的実在論、解釈主義である（野村 2017）。

社会は「そこにある」「明確に示すことができる」と考えるのが実証主義の立場である。実証主義の立場でよく行われるのが、統計分析を用いた計量的研究である。計量的研究は、社会というものが実証的に示せるという立場で行われることが多い。たとえば、教育格差の計量的な研究は、社会のなかでの格差というものを数値でとらえて、実証的に明らかにできるという前提に立っている。

実証主義の正反対の立場が解釈主義である。つまり、社会というものも人々が解釈するなかでしか成り立っていない、という考え方である。たとえば、一方的にひどい言葉を言っている人と、それで責められている人がいるとする。人はそこに何が起きているかは、解釈しないと理解できない。なんらかの形で解釈が行われることで「言葉によるいじめ」や「パワハラ」だと理解することができる。

この両者の間に位置するのが批判的実在論である。実証主義のようにすべてを明確に実証できるかのように社会が実在するとは考えない点で批判的な疑いをもつ立場である。一方で、すべてが解釈としてみ存在するわけではなく、なんらかの形で実在が存在すると

考える、両者の間で批判的な実在としての社会を探る立場である。

皆さんが実際に論文や専門書を読むとき、著者たちはどのような立場に立って、事象を説明しようとしているのかを理解しながら読んでみると、著者の主張がより深く理解できるはずである。

2 教育社会学から見て、教育にはどのような役割があるのだろうか

□> 社会に合わせて生きていく

教育には、どのような役割があるだろうか。「教育」に対応する英単語 education の原義には「引き出す」という意味がある。社会との関係で、教育を考える教育社会学において、一番重視する教育の役割は「社会化」である。社会化とは、人が社会に適応して期待されるとおりに行動することを学ぶプロセスである。人は、社会とかかわるなかで、絶え間なく社会化のプロセスにさらされている。

皆さんは、朝起きて何をしたらろうか。大学の授業が午前中にあるればそれに合わせて起きたかもしれない。身支度を整えて、朝食をとったという人が多いだろう。朝食はとらなかったという人もいるだろう。パンで朝食をすませた人もいれば、ご飯を食べた人もいるだろう。身支度はどのようなことをしたらろうか。髪を整えたり、化粧したりしたらろうか。朝何時に起きるか、朝食をいつ、どのようなものを食べるか、どのような身支度をするか、このすべての行動が社会化の結果として現れている。人や社会が違えば、社会化された個人は違ってくる。教育社会学の考え方の中には、このよう

に人の違いは社会とその社会のなかでの社会化によって生まれるという前提がある。逆にいえば、個々人がもっている遺伝的形質の影響よりも周囲の環境のほうが重要ではないかという前提に立っている。

あなたは今生きている社会に、ありとあらゆる点で合わせたり、反発したりしながら生きている。それはとても正常な反応である。

皆さんは、中学校や高校に進学して、はじめて制服を着たときにどのように感じただろうか。ある集団のメンバーになったことをうれしく思って、誇らしく感じたという人は、積極的に社会化された人であり、これから入ろうとする社会の規範★を内面化した人である。一方で、窮屈だと思った人はいないだろうか。窮屈なボタンを緩めて着て、注意された経験はないだろうか。これも立派な社会化の経験である。厳密に区別していうと、このように注意される過程は、社会化ではなく、逸脱した行為に対して、社会統制が行われているといえる（→第8章）。学校などの教育機関には、あるべき姿に向けて「社会化」を進めるだけでなく、そこから外れようとしている人を注意してコントロールする「社会統制」の機能もある。

□▷ まわりに合わせることの意味

小さいころに「みんな持っている」と言っておもちゃをねだった経験はないだろうか。あの「みんな」という言葉を専門用語で表現すると「準拠集団」という単語になる。準拠集団とは、個人の態度や意思決定の手がかりを与える集団のことである。「みんなが持っているゲーム機を私もほしい」というように他人と比較したり、「みんなが持っているのだから私もゲーム機を持っているべきである」という規範的な意味をもったりするのが準拠集団である。

あなたの身のまわりにはどのような準拠集団があるだろうか。大学生の皆さんならば、同じ学部学科の仲間、一緒に授業を受ける仲間、部活やサークルの仲間、アルバイト先の仲間などがいるかもしれない。そしてそれぞれの仲間によって、大学の授業への熱心さが違うかもしれない。この熱心さの違いが「あなたが授業にどの程度熱心に取り組むか」に影響するとすれば、あなたの周囲の準拠集団があなたの大学という社会への社会化に影響していると理解できるだろう。

このような準拠集団のなかで、小さい頃から大きな意味をもっているのがジェンダーの違いである（→第5章）。ジェンダーとは、生物学的な役割を強調する性（セックス）に対して、社会的な性別の違いを強調する概念である。大学生の皆さんは、入学式に何を着ていったらうか。近年の研究で、大学生の就職活動が広まっていったことによって、リクルートスーツの形が定まっていったことが明らかになっている。大学の新生も多くは黒のスーツ、女性ならばスカートのスーツを着るようになった（田中 2019）。女子学生ならば成人式の振袖や卒業式の袴のことを考える人も多いことだろう。現代日本の大学生活は、ジェンダーの違いに触れながら、社会化していく過程と見ることもできる。

ジェンダーによる違いが、大学だけでなく、その前に通った学校や幼稚園、保育園あるいはこの先進むであろう就職先にもさまざまなところに埋め込まれていることに、勘のよい人は気づくだろう。たとえば、男女で異なる学校制服を着ることは、その一例である。最新の研究によれば、日本の学校制服のうち、今でも多くの歴史のある学校が用いているセーラー服は、100年前に、最も歴史のある学校で用いられるようになった。最初は「恥ずかしい」という声も

コラム2 あなたは友情派？ 対立派？——教育社会学における機能主義と葛藤主義

この節で、社会化と社会統制という考え方を紹介した。実は、社会のなかで人が出会った時に、積極的に友好関係を築いていくか、それとも対立関係となるかという見方は、社会を見るうえでの根本的な見方の違いを生み出している。教育社会学や社会学では、積極的に友好関係を築く側の立場を「機能主義」と名づけ、積極的に敵対関係を築く側の立場を「葛藤主義」と名づけている。

典型的な機能主義者はÉ.デュルケーム（1858-1917）という社会学者である。彼は、教育社会学にかかわる著作も数多く残しており、教育社会学の祖と言える人物の一人である。デュルケームは、19世紀後半から20世紀前半のフランス社会が発展していくなかで、人々が有機的に連帯し合って助け合う社会をつくっていくべきだと主張した。今の教育の高度専門化に通じる発想である。

典型的な葛藤主義者は、経済学や歴史上の人物としても有名なK.マルクス（1818-1883）である。マルクスは『共産党宣言』の冒頭で「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」と述べている。この考え方は、教育社会学では、特に教育と選抜の分野で応用されており、試験を通じた競争関係とその結果がもたらす社会移動を説明するうえでよく用いられている。

この章で「社会学的想像力」という考え方を紹介したが、この機能主義と葛藤主義については、自分にとってなじみのない側の立場がどう考えるか、という思考実験をしてみると、いろいろと見えてくることがある。

ルールがあったときに積極的に従って協力し合える人は、不満があってもルールを破ったり、変更を求めたりする人の立場になって考えてみると、どのような人がルールによって不利益が生じるかわかるだろう。逆に、いつもルールに不満がある人は、どのような人たちはルールを守りやすいのかを想像してみると、そのルールのあり方を通じて、適応が求められる社会のつくりが見えてくるであろう。

このように自分とは違う見方から考えてみるというのは、この後

のどの章にも通じる発想方法である。特に、第Ⅳ部のように、マイノリティについて考える際には重要な視点である。

あったセーラー服が地域の名門女学校の制服として、戦前に浸透していった（刑部 2021）。

□▷ 私たちは創られた伝統としてのルールに合わせて生きている

社会学には「伝統の創造」という考え方がある。「伝統の創造」としてもととの研究で取り上げられているのが、スコットランドのタータンチェックとバグパイプである。これらは、当初野蛮で否定的なイメージであったが、イングランド、アイルランドに対抗して積極的にスコットランドの伝統として創り上げられた歴史がある（ホブズボウム・レンジャー 1992）。日本の学校の制服の歴史にあてはめた場合、女子生徒のセーラー服や男子生徒の学ランは日本社会が創り上げてきた伝統ともいえる。

学校のなかで守らなければならないルールは、しばしば創造された伝統の産物である。たぶん、皆さんの多くは「学校のチャイムに合わせて行動する」ことを求められてきたのではないだろうか。学校や先生によって、チャイムが鳴る前に座る、チャイムが鳴っている間に座る、チャイムが鳴ったら座るといったルールはかなり異なるようである。しかしながら「時間を守る」という行動規範を社会化する行動である点では共通している。実は、時間厳守という考え方も現代社会に至るなかで変化してきた観念である（橋本・栗山編 2001；真木 2003）。

学校にとどまらず、教育という活動全体の社会的な役割は、まず、

社会化と社会統制にある。現代社会において、教育の役割を担う学校では、このチャイムのように、守るべき規範を隠れたカリキュラムとして組み込んでいる。次の節では、本章で今まで紹介してきた概念を用いて、日本の学校の様子を読み解いてみよう。

3

教育社会学から見る日本の学校



日本の学校に通ったことがある人は、その様子を思い出してみよう。朝は、遅刻しないように学校に行く。これができるかが、まず学校という社会に適応できているかの始まりだ。

始業の時間になったら、おそらく先生は、最初に誰が来ていて、来ていないか、をチェックするだろう。その名簿はどのようにできているだろうか。おそらく日本語ではあいうえお順のことが多いであろう。今は、男女混合名簿のところがいっぱい多いものの、以前は、男女別で、男の子が先、女の子が後という名簿が広く使われていた。2021年6月29日付『朝日新聞』に掲載された日本教職員組合の調査によると、1993年度にはわずか13%しか男女混合名簿を使っていなかったのが、2020年度には87%まで採用率が増えている。男女混合名簿とするか、男女別名簿とするかで、ジェンダーの観点から見て、隠れたカリキュラムとしてどういうメッセージが伝わるかの違いはよくわかるだろう。

さらに、学校の授業の様子を思い出してみよう。おそらく先生は立っていて、児童・生徒たちは座っていることが多いだろう。ところが、小学校1年生の頃を思い出してみると、教室に授業時間中、じっとしていられない子というのがいなかっただろうか。実は、授

業時間中、じっと座っていられることは身体の社会化の結果である。今の学校の教室の形、机の配置などがそのような身体の社会化をするために改善されていったことが歴史的に明らかにされている（柳 2005）。

授業では、どのような科目があっただろうか。ここで、最初のクイズの Q1.3 の解説をしながら考えてみよう。日本の中学 1 年生の学習指導要領*に定められた国語・社会・数学・理科・外国語の合計時限数は、中学 1 年生の授業全体の何%だろうか。この正解は、b の 60% である。正確に言えば、2017 年に告示された学習指導要領では 630 時間／1015 時間で、62% である。OECD（経済協力開発機構）平均も 2020 年度では 60% で、だいたい平均のとおりである（OECD 2022）。すなわち、日本でも、他国でも、学校はいわゆるアカデミックな知識以外に、保健体育を通じて体を鍛えることや芸術にかかわる経験をすることが公式のカリキュラムとして期待されている。

日本の学級活動のうち、しばしば珍しい活動として注目されるのが給食と掃除である。日本の学校では、しばしば給食当番を班ごとに順番にまわし、給食当番が配膳を行う。掃除は、班ごとに場所の分担を決め、ローテーションしながら、それぞれの場所を掃除していく。日本の学校ではごく当たり前の活動であるものの、給食は一律の食事を食堂で配膳してもらう国も多いし、清掃のために清掃員を雇っている国も多い。

日本とアメリカの学校生活を通じた人間形成過程の違いに注目した研究によれば、日本では班で割り当てられるクラスでの役割がアメリカでは「トムの仕事」「ジェニーの仕事」というように個人に割り当てられることが多いことが明らかにされている（恒吉 1992）。

日本の学校では集団活動が多いといわれるのもこの点に由来する。

このように、社会が異なれば、学校を通じて、社会の一員になるために行われる教育も異ってくる。次章以降も、このような日本の学校教育の特徴を多面的に見ていこう。

/// Exercise 演習問題 //////////////////////////////////////

あなたがこれまで受けた教育で、意味があったと思うことと意味がなかったと思うことを書き出して、そこでどのような社会化や社会統制が行われていたかを考えてみよう。

/// Book guide 読書案内 ///

- ・ C. ユール・C. ソープ, 2018, 『10代からの社会学図鑑』(田中真知訳) 三省堂

本章で紹介した「あなたは誰?」を手がかりに、現代社会学の考え方を紹介する。カラーで図表が多く、入門に最適。

- ・ L. クレハン, 2017, 『日本の15歳はなぜ学力が高いのか? — 5つの教育大国に学ぶ成功の秘密』(橋川史訳) 早川書房

原題は *Cleverlands* で邦訳タイトルとは大きく異なる。日本を含む国際学力テストの高い国々を訪問し、社会化や隠れたカリキュラムの違いに迫る。

- ・ 日本教育社会学会編, 2018, 『教育社会学事典』丸善出版

ネット時代に合わせて読み応えのある中項目事典。この本で用語を調べながら、学会誌『教育社会学研究』の興味のある論文を読むことが専門的な勉強の入口となる。

/// Bibliography 参考文献 ///

- ヴェーバー, M., 1998, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』(富永祐治ほか訳) 岩波書店。

- OECD, 2022, 『図表でみる教育——OECD インディケーター (2021 年版)』
(矢倉美登里ほか訳) 明石書店。
- 刑部芳則, 2021, 『セーラー服の誕生——女子校制服の近代史』法政大学出版局。
- 田中里尚, 2019, 『リクルートスーツの社会史』青土社。
- チュダコフ, H. P., 2015, 『年齢意識の社会学』(工藤政司・藤田永祐訳)
法政大学出版局。
- 恒吉僚子, 1992, 『人間形成の日米比較——かくれたカリキュラム』中央公論新社。
- 日本社会学会・社会学事典刊行委員会編, 2010, 『社会学事典』丸善。
- 野村康, 2017, 『社会科学の考え方——認識論, リサーチ・デザイン, 手法』名古屋大学出版会。
- 橋本毅彦・栗山茂久編, 2001, 『遅刻の誕生——近代日本における時間意識の形成』三元社。
- ホブズボウム, E.・T. レンジャー, 1992, 『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭ほか訳) 紀伊國屋書店。
- 真木悠介, 2003, 『時間の比較社会学』岩波書店。
- ミルズ, C. W., 2017, 『社会学的想像力』(伊奈正人・中村好孝訳) 筑摩書房。
- 柳治男, 2005, 『〈学級〉の歴史学——自明視された空間を疑う』講談社。
- 矢野真和, 2011, 『「習慣病」になったニッポンの大学——18 歳主義・卒業主義・親負担主義からの解放』日本図書センター。

【y-knot】

これからの教育社会学

Towards a New Sociology of Education

2023 年 1 月 20 日 初版第 1 刷発行

著 者 あいざわしんいち い き な つ み うち だりょう とくながとも こ
相澤真一・伊佐夏実・内田良・徳永智子

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

装 丁 高野美緒子

印 刷 株式会社精興社

製 本 牧製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2023, Shinichi Aizawa, Natsumi Isa, Ryo Uchida, Tomoko Tokunaga.

Printed in Japan ISBN 978-4-641-20003-6

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複製（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、（一社）出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mailinfo@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。